

〔曲名〕 Intermezzo

間奏曲

〔曲種〕

〔作曲者〕 S.Falbo

サルヴァトーレ ファルボ

〔編曲〕 Jiro Nakano

中野二郎

作者は十九世紀後期シチリア、シラクサのアヴォラに生まれ、パレルモの音楽学校でCasiとStronconeから

ピアノをFavaraから対位法とフーガをZuelliから作曲法を学んだ。

1896年大管弦楽の為のScenaliricaと五声のフーガを提出して卒業、五年後作曲コンクールに受賞してNicosiaの吹奏楽団の指揮者となった。

作品にはオルガンを伴う五声のKyrie Eleisonヴァイオリンとピアノのロマンツァ、弦楽のLirica、古典形式の間奏曲、

Pompadour,アマートの詞による一幕のオペラ、ヴァイオリンとピアノのセレナータ、

及びオペレッタLa Favola della Principessa（王女の物語）三楽章の組曲等がある。

著名なものは歌劇フィオレルロの中の管弦楽の為の序曲Nella Lottaで、

マンドリン関係ではミラノのイル・プレットロ主催のコンクールに屢々入賞、斯楽の至宝作品となっている。

之等は純プレクトラム四重奏曲、二短調序曲、田園写景、西班牙組曲である。

この間奏曲は1916年3月号のイル・プレットロ誌に発表されたもので既に第一次欧州大戦耐（たけなわ）の頃で

イル・プレットロ誌も記事なく細々命脈を保ち、休刊寸前のものである。

コンクールに入賞した数多の作品と比較すると可成り旧作に属するものと推定されるが、既に凡ならざ

る資質を感ずる。

本15集もブランツォーリの望まれし日で余白の紙数少く、本曲以下原編成の儘収録した。

1972年5月1日発行

イタリアマンドリン百曲選第15集より

-----  
-----  
ファルボについてはその後中野二郎氏の意志を引き継いで渡伊した、  
SMDのOB岡村光玉氏や現在プロで活躍中の同じくSMDのOB石村隆行氏によって、  
イタリアでの熱心な調査によりかなりの詳しいことが判って来ましたので紹介します。

Salvatore Falbo Giangreco (サルヴァトーレ・ファルボ・ジャングレコ)

ファルボは1872年5月28日シチリア島シラクサ近郊のアヴォラ (Avola) に生まれた。

ジャングレコは母方 (Corridina Giangreco) の姓を名乗ったものである。

ちなみに父方は (Gaetano Falbo) で長男として生まれる。

幼少の頃より音楽に親しんだが、正規の音楽教育を受けたのは意外と遅く18歳の時に

P.タスカに和声を学び、パレルモでは G.ミチェリ に対位法を学んだ。

2年後パレルモのベルニーニ音楽院に入学、G.ズエルリをはじめとする教授より厳格な指導を受ける。

同じ頃ズエルリ教授門下に、ファルボと同年のステファノ・ジェンティーレが在籍していたと思われる。

彼はA.ヴィツァーリ (本家イタリアのマンドリン機関誌『イル・プレットロ誌』主幹) による』

マンドリン啓蒙運動の早くからの協力者であり、最初のマンドリン作品も1890年代には発表している。

またファルボの最初の師であるタスカ、ミチェリもマンドリン音楽に強い興味を持っており、

彼らとの交友が、ファルボにマンドリンに対する興味を持たせるきっかけとなったのではないかと考えられる。

1896年に同音学院を輝かしい成績で卒業、5ヶ月後ニコシア市吹奏楽団の指揮者に選出され3年間務めた後

アヴォラに帰り、同地の吹奏楽団の指揮者を1922年まで務めた。

彼は多作家ではなかったが、歌劇、管弦楽曲、吹奏楽曲、ピアノ協奏曲等、極めて価値ある作品を残している。

作曲家としてのファルボにとって、彼のたった一つの誤りは生涯郷里アヴォラを離れようとしなかった為、

音楽界全般から十分な評価を得ることが出来なかった事と言われている。

一方マンドリン作品「二短調序曲」、二つの組曲、「プレクトラム四重奏曲」、未発見の「イタリア序曲」

等は当時の斯界より極めて高い評価を獲得しているのである。

しかし、1927年4月8日、作曲家として正に円熟期をむかえようという時にファルボは逝ったのである。

原因はその頃世界中で約2億人の感染者を出し、その内死者は1千万人を越えたといわれる

スペイン風邪（インフルエンザ）によるものであった。

タスカ：1892年に初演した歌劇「サンタ・ルチアへ」の中でマンドリンとギター伴奏による大規模なセレナータを書いている。

ミチェリ：1870年のナポリ海浜博覧会の為に組織されたイタリアマンドリン史上初めて百人を越えるマンドリンオーケストラの為に「グラン・セレナータ」を書いている。